

革命期の英国詩歌：論説

著者	厨川，辰夫
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 1 9
ページ	1 - 2 0
発行年	1907
その他の言語のタイトル	革命期の英国詩歌：論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/6002

龍南會雜誌第百十九號



論說

革命期の英國詩歌

厨川 辰夫

再三の督促をうけながら書きぬは、本誌に適當な好題目を捉へ得なかつたからである。此篇は昨年自分が起稿してまだ世に公にせぬ「近英詩人論」の序論から、其一節を抜いたので、諸君のうち英詩に興味を持たれる人に多少の参考になれば幸である。

佛國革命前後の英詩、即ちロマンティズム勃興時代の作品は夙に邦人の間に傳唱せられ、また諸君にもれ馴染の詩歌である。のみならず十八世紀の風潮を打破して非クトリア朝の大詩人を生み出す迄の過渡期で、あるから、英詩發達の歴史から考へて最も重要な時期と思はれる。もより最近の詩歌を論ずる序論として書いたものだから、粗枝大葉の概括論に過ぎない。

上

そのむかし處女王朝の御宇に空前の發達をなしたりし英詩の琴の音しばしは絶へて、人の胸奥に湧き出でたる血あたたかき熱情の歌きこえずなりしより殆む百五十年。この間、聲調形式の美を

競ひて真情を歌ふこと稀なりし詩歌は、バアンズ、クウバア等の作品によりて根底より一大變化を蒙むるに至りぬ。これぞ近世英詩の淵源と見做すべき最も重要な革新の時期にして、自然と人生とに對する詩人の態度は、こゝに全く其趣を異にするに至れるなり。

英詩の晨星ヤヨオサアにはじまりて、スペースンサア、シェイクスピアなど曠世の天才によりて大成せられたる詩界の風潮は、佛蘭西の影響をうけたるアン女王朝の詩歌に於て、また見るべからざるに至りぬ。ドライデンと之に次で起りしポーアなど、皆自然に忘れ、想像をすてゝ、情熱を疎むじたる詩歌を以て一代を風靡したれども、やがて起りし古典研究の風は、グレイ、ヨリンズなどの詩人を生み、沙翁と同代の作家の名什に情緻の討究を試みて、いにしへを忍ばんとする者多く、有名なるバアシイの『古歌拾遺』(Dr. Percy's Reliques of Ancient English Poetry, 1765)あらはれて、はやく既に後のスコット等の素をなしぬ。マクファアソンの『オシアン』(Macpherson's Ossian 1763)また殆むど時を同うして出でたるは、英國のみならず大陸の文學にも多大の影響を興へぬ。詩界に於ける革新の氣運いまや鬱勃として、新時代の曉色すでに東天にあらはれ、過去詩壇の明星漸く光なからんとす。

此時に於て最も顯著なる現象と見做すべきは詩体の變化なり。彫琢の末技に走りて生命なく熱情なき在來の詩風を破壊したるものは、まごころ厚き詩人クウバアの叙情詩にして、之を大成せしものはバアンズの詩集なりき。更に之を自然と人生とに對する詩人の態度に見むか、人類の自然界に於ける關係漸くあきらまらんとし、ポーア一派の作に於ては、人間を主題として僅にその背景に

用ひられたる天地山川は、いまや一轉して詩歌の最も主要なる題材となりて現出し、蘇蘭土のひとつトムソンが四季折々の樂しき田園の風光を叙したる名作（一七二六—三〇）は、此方面に一新時期を劃したりき。ユリンズ、グレイの諸作のほか、ひろく邦人の間に知られたるゴールドスミスの『旅人』（一七六四）『荒村行』（一七七〇）また此新思潮の代表にあらずや。また更に之を人間に就て見るも、從來の偏狹なりし風潮は去て、詩人の同情はひろく異邦の俗、ならびに下層社會の民衆にも及びぬ。

上來のぶる所の詩界革命の大業を起し、前代のあとを承けて後の詩人をつくりしものはクウバア、クラツプ、バアンズの三詩人なれど、われ等は先づこゝに井リアム、ブレエク（一七五七—一八二七）の大名を逸すべからず。かれはエリザ王朝の詩風を追慕して之を復活したるひと、『エドワアド三世』の斷片に明にマアロウの豪壯なる遺韻を聞くことを得べく、『詩神に寄する歌』は在來の詩歌に稀なりし熱情あふるゝが如くにして、バラッド体の諸作には、『オシアン』や、バアシイの『古歌拾遺』の風致を寓せて、その影響後のナルヅナルスを起せしのみか、またラフハエル前派の作品に影響を與へ、今なほ二十世紀初期の英國現存の詞人イーツの歌に神秘幽奥の遺韻を傳へたる、まことに驚くべきにあらずや。

井リアム、クウバア（一七三一—一八〇〇）がオオマア其他古典の翻譯、ならびに諷刺の歌などは、寧ろ前代の傾向を代表したる者なれど、そのすべての詩篇に見わたる一種の宗教思想こそ、實に後の大詩人テニソンやブラウニングにあらはれたる同じ要素の源泉とも見做すべきものなれ。『ジョーン、

ギルピン』などの輕妙なる滑稽は、更に新趣味を英詩の歴史に加へ、かの母のうつしねを得たる折の歌などは、エリザ王朝の以後ながく前代の詩歌に絶へたりし人間の眞情を流露せる点に於て最も注目すべきもの。またブレイクとたなじく動物を詠じて、之が人間との關係を歌へるか如きは、その後代に大なる影響ありし点にして、大作『タスク』(一七八五)の如き、みづからが田園の生活を歌ひて結ぶにその宗教思想を以てし、自然と人生とに對する新詩人の態度こゝに益々あきらかなるを見るべし。

「貧者の詩人」と呼ばるゝジョーヤ、クラツプ(一七五四—一八三二)の作はクウバアに見ゆるが如き「ユウモア」を欠きたれど、まづしき村びとの生活に温き同情を寄せたるまごころの歌こそ、新詩界の傾向を代表したる者なれ。されどこゝに注目すべきは、戀愛の至情を歌へる詩歌の絶へて久しく英詩に見られざりし事にして、今やこの方面に於て、處女王朝のいにしへの趣を復興し得たるものはロバート、バーンズ(一七五九—一七九六)の作に外ならず。かれが最初の成功こそ、其かぎりなき清新なる戀愛詩にてありしなれ。みづから貧しかりしこの田園の詩人は、貧者に對する同情のあつきもたのづからなれど、クウバア、クラツプを合せて此三詩人が殆んど時を同ふして同一方面に留意したるも奇ならずや。

さは云へど、詩歌の發達は常に時代思潮の暗遷默移に伴ふ。余が以上説きたる諸詩人を動かして、殆むど時を同じうして、同一傾向を帶ぶるに至らしめたる當時の思想界は如何なりしぞ。自由民權の思想、はやく既に歐洲の天地に瀰漫して「自然に歸れ」と叫びしルッソの聲は時人の耳をそばだ

てぬ。都門を去て田園の風致に興味を覺け、過去文學の中心たりし貴族社會を顧みずして、素朴なる農夫や貧人の生活に、詩人が多大の同情を催ふしたるも皆一にその近世的大思想の反影に外ならざるなり。わもふに近代文明の淵源たる文藝復興期ルネサンスの時代に其萌芽を發して、漸次發達し來れる自由、憐愛、平等の思想は人類の間に設けられたるすべての差別を打破し去て、眼中また階級、國家的境界の類をわかず。政治、宗教、道德など人文のあらゆる方面に著しき影響をあたへぬ。詩文の界、豈獨りこの餘波の圈外に脱することを得んや。しかれども思想はながく内に沈滯せず、やがて佛國に於て有形の行爲となりて現はれしもの、即ちかの大革命にして、千七百八十九年のバスター・エ破壊は、まさに其最頂点に達したるものなりき。

近世人文史上のその大なる事件は、また英國の詩歌に一新時期を劃したるものにして、實に千七百九十年より千八百三十年代に及べる四十有餘年間の英詩は、殆む必ずして同様の傾向を以てあらはれ、十八世紀晩期の風潮を完成して、更にこゝに、未曾有の大發達をなしたる十九世紀英詩の基礎をつくりぬ。かのナルヅアルス、コウルリツヂ、サウジ等湖畔詩人の一派まづ所謂 "pastoral-erotic" の同情を以てこの大革命の氣運に呼應して叫びたれど、やがて腥風血雨その悲酸の極を盡すに及んで遂にこれを去り、スコット亦た之に背きて革命が破壊したるいにしへの世にあこがれ、バイロン、シェリイは熱情の筆を揮ふて俗習に反抗し、革命の思潮を歌ひ出でぬ。キイツ、ローヤアズの人のみはこの氣運に與らざりしかど、その熱情を人心に鼓吹したる偉功はた没すべからざる者あるなり。

湖畔詩社レイクサイド（この名稱は固より嚴密なる文藝批判の許すところにあらねど）の一派が詩界に貢獻した

る偉業は我等の最大の注意を促すべきものなり。先づ千七百九十八年を以てナルヅナルス（一七七

〇—一八五〇）とコールリツヂ（一七七二—一八三四）との合作になりたる『叙情詩歌集』リイカルバラツヂ出でたり。

この詩集を以て、直に詩界發達の一轉機となすは、文學史家往々にして異説を挿めども、自然と人生に對する舊來詩人の体度を一變して、別に新生面を拓きたるは毫も疑ふべからず。さきにこの二詩人、共に杖をソマアセツトの阜に曳き、或はデヴォンの濱邊をさすらひて、かなた茜さす夕べの空を望み日と共に沈みゆく帆かげを眺めて、自然の靜境に詩思を養ひしもの、やがてこの新韻をなして騷壇にあらわれたるなり。而して二大詩人は此集に於てひとしく想像的寫實主義イマジンチヤイリアリズムをとりたるなれども、兩者たづのから其方面を異にしたなり。ナルヅナルスは尋常一樣卑近の生活を描き、その富澹なる詩才よく之を醇化したるもの、コウリツヂに至ては材を超自然的なる説話の類によりて、精緻なる寫實の印象を讀者に與へんとしたるものなり。

ナルヅナルスが觀じたる自然は是れ活きたる自然にして、山川草木すべてを一貫したる一の至高の靈が、人間の精神と常に調和を保ちて、兩者互に相通するものなるを信じ、自然に對するあこがれの思は、彼が妹に對する愛情と毫も異なれるを見ず。されど自然に對するこの愛は、更に一步を進めて人類に及びぬ。湖畔の夕まぐれ牧笛の聲がすかなるを耳にしては、牧童野人は直に自然界の一部なるを感じ、歡ふところはかれ等の眞情にてありしなり。げに『愛をかれは賤が伏屋に見出でぬ。日毎の師と仰ぎしは森といさゝ川、また星あかき大空の靜默、さみしき山かげの眠なりぬ』。

かくの如きはあきらかに前代の詩人と正反對の思想にして、倫敦の熱鬧のちまたを歩める折も、大陸諸邦に杖を曳てしばし自然界の美に背きたる折も、この根本思想に何等ことなる所あるなし。退てひそかにライダル山下の居に静思せるかれが、人類に對する愛は、自由平等の思想をして益々ふかきを加へしめ、那翁の暴戾を憤ること最も大なりしも宜なるかな。

ユウルリツヤの詩篇が節奏の美に於て英詩の古今に比なく、後代の騷人こゝに學ぶところ頗る大なるは言ふを待たざれど、かれが過去の夢幻的なる説話を材として、たくみに幽玄の趣致を寓せるは、ながく後人の讃嘆を値ひすべきなり。ことにその自然を描くや簡潔の筆致神に入りて、光景のあきらかに目前に生動するゆを覺るは、われ等をしてダンテが神曲の筆を想ひ起さしむ。そのすべての特色が最もよくあらはれたる『エンシエント、マリナア』の篇を誦したるものは、この詩人が同情のいかに深厚なるやを知るべく、ひとたびは謳歌したる佛國革命が遂に殘暴を極むるに至てや、服従なき自由を惡みたる彼の思想に至ては、他の諸作にもこれを窺ふことを得べし。(ユールリツヤとシャルツナルスとの評論は世間もごより其書に乏しからねども、全般の傾向を知るに於ては余は特にシャープの著『自然詩論』と、近英散文の大家ペイターが『アップレシエイション』に收めたる論文の精讀をすむ)。

詩人としてのサウジ(一七七四—一八四三)の價值は、かみの二詩人に劣りたるの觀なきにあらずと雖も、時人の尊崇はむしろ却て其上にありしを以て、熱情あり滑稽ある其豊富の述作が、時代に與へたる感化決して尠少なりとせず。殊にその二大作『サラバ』と『ケハアマ』とは材を遠く異域の説

話にとりて、自然人生に對する其深き洞察を、壯麗の詩集によせたる雄篇なり。

コールリツヤ、オルツチャルスの『叙情詩集』、サウジの名作、出でる後こゝに暫く寂寞なりし詩界は、やがて『最後樂人の歌』(一八〇五)の作者スコットに、みなひとしく其視線をあつむるに至れり。小説の方面に於けるかれの偉業はしばらくこゝに論せず。詩人として其作品に後代の非難を招きたる幾多の欠点はあれども、文學史上の地位に至ては既に牢乎として動かすべからざるものあるなり。中世の騎士時代を詩材として、巧に自然の風光を叙したるその物語詩は、いかばかり時代の思潮を動かりたりしぞ。バイロン、これが爲めに起り、シェリイ、キイツ亦た時人の注目を惹くに至りしもかれが爲めのみ。なべてスコットの詩篇には神祕幽奥の趣すくなけれど、その極めて明快にして生氣躍るが如き叙事の筆は其當時に殆むと匹儔を見ざりき。かれは獨乙文學の影響をうくる事甚だ多く、ことに其國の歌謠に眞摯の研讀をかさね、十八世紀の詩人ピュルゲルの作『レノオレ』(Burger's Lenore)のこと等は、みづから筆をとりて之を英譯するに至れり。ゲーテがライン河畔の中世を歌ひしと同じ体度を以て、かれは蘇蘭土の生活を描かんと欲したりしなり。ねなじく革新期の詩人なれどラルツチャルスは目前卑近の生活のみ寫したるに反して、スコットは直に現代を超超して過去の時代に讀者の同情を喚び起さんと試み、またシェリイは多く未來の代にあこがれぬ。

ひとしく革命的の時代精神にはぐまられたる詩人なれど、バイロンとシェリイとは上述の諸詩人に比して少しく趣を異にせるものなきにあらず。蓋しラルツチャルス、コールリツヤの如きは、對岸佛國の民衆が自由を叫びたる活動の初期に於て之に呼應したるものなれど、遂に腥風血雨の慘を見る

るに及びて、自由を名とせる罪惡のいかに大なるやに驚き、ただ詩壇の革新を鼓吹したるに止まり、いまだ社會道德に對して何等の反抗を試みざりき。これあるに至りしは即ちバイロン、シェリーの一派が、所謂英人の「偽善」に對して絶叫し、道學先生をして顔色なからしめしにはじまる。

バイロン（一七八八—一八二四）が初期の述作には、過渡時代の詩人の常として猶ほ十八世紀舊流のたもかげをとどむるあれど、また熱烈なる破壊的勢力が詩壇に與へたる一大革命は、他の騷人の企て及ばざるどころなり。革命詩人としての其特色などに著しき『ドンジュアン』に見よ。在來の政治宗教道德など、人文のすべての方面に對して其反抗の氣焔たる所謂バイロニズムの猛勢、ほとんど一面を向くべからざるものあるなり。篇中に詩は『情熱に過ぎず』と喝破したる、言ふところは本能を重じて意志を棄て個人的想像を恣にすると共に、道義慣習等の羈絆を脱するなり。かつてカアライルが評して言ひけん如く、猛鷲の肉に餓ゐたるが如き彼が叫びは、壯烈いふべからざる詞章の美と相待ちて、詩界に新らしき光明を齎したり。熱烈奔放なる彼が詩想ひとたび筆端にあらはるゝに及びては、そのすべての豪放なる作品は叙事詩戯曲のわちなく、常にかれみづからを主人公としたる純然たる主觀詩と化しりて、所謂「世紀病」*Le mal du siècle*の体現にあらざるなし。げにかれを以て詩界の大那翁ナポレオンなりとするは、自我の傾向あくまでも強うして、其作品に現はれたる彼が個人性は、さながら烈火天を熾くの概あればなり。ゲーテが評して、詩文界また斯くの如き拔群の性格を有する者なしと云ひたるは宜なるゑな。

さはいへど、かみに述べたる諸詩人はたはかた新舊の二大潮流が互に衝突せる時期にありしを以

て、未だなほ或程度に於て過去の風潮を脱却せざるの觀なきにあらざりしも、今やセイタニツク派詩人の領袖バイロンが最後の猛撃に會して十八世紀詩風また毫も名残をとめざるに及むで、こゝに純然たる新世紀を代表せる二詩人の現出を見るに至れり。シェリイ（一七九二—一八二二）とキイツ（一七九五—一八二二）とこそは、げに新らしき十九世紀の詩人なりき。

『告天子の歌』『雲』など珠玉の名篇によりてひろく邦人の間に知られたるシェリイの詩篇は、全く枯淡なる批評によりて傳へ得べからざるもの。げにや「地上を去り、燐の雲をさながらに、あまがけり行きて、高くまたいやたかく、飛ぶや碧空を、歌ひてはのぼり、のぼりては歌ふ」この *ethereal* の詩人こそは、われ等みづからが現代生活を超越して、直に其作者に向て深厚の同情をそぐに非ずんば、味ふことを得べからざるものなり。宇宙の至上なる美を感受することの敏きは、彼をしてさしも豊麗なる英詩の古今を通じて、叙情詩人として殆むど匹儔なからしめんとす。奔放なる熱情と一種の神秘なる幽致とを具へて自然界に對するや、チルヅラルスが冷靜なる哲理を根底とせるに反して、かれは常に愛を以て原動力となしたりしなり。

『アドネイス』の悲歌あるがために、また共に年わかくして世を去りたる薄倖の詩人なればにや、キイツの名は常にシェリイと共に相並びて稱せらるれど、美に對するふたりの態度はいたく趣を異にしたり。シェリイの現世に對する詩觀がむしろ超然として、朦朧、捕捉すべからざる如きものあるに比して、キイツのは微細なる事物のうちにも、過去の時代を通じて能く現實界を洞觀し得たりき。青春の熱血湧くが如き叙情詩人としては、バイロンが奔放なる不滿のさげび、シェリイの夢想

憧憬のたもひに比して、キイツは常に感官セシスの美を重むじたる清新の氣あるを特色となす。

キイツはげにも宗教信仰の態度を以て美を崇拜しぬ。先づ其大作『エンディミオン』(一八一八)のはじめに見よ、「美なるものこそ、そはに歡喜なれ。その愛うしきはいやましてまた何の時にか無に歸すべきぞ」といひ、また名高き『希臘古瓶の歌』の終に「美は眞なり。眞は美なり、地上に在りて知るべきは、唯だこれのみ」と言ひたるは、みづからの信條を明にしたる語ならずや。而してまたこの美を感受するに當りて、かれが世の常の詩人にすぐれたるは、五感の官能によりて外界の印象を受くるに敏き事にして、試に『セントアグネスの夕』(一八二〇)の作に見むも、觸覺味覺聽覺等すべての感能に著しき印象おるを知るべし。更にまたその絢繡たる詩風に至てはかれは直にユリザベス王朝の詩歌に範をとりて、スペンサアの如きは最も深く私淑したるなり。

前代の思潮を味ひてこれを移植し復活するの技は、キイツに於て吾人の最も注意すべきところなり。千八百十二年エルギン卿がいにしへのアクロポリスに得て更に大英博物館に納めたる希臘の彫刻は、近英の藝術に多大の影響を與へたるものにして、キイツ先づ深くこゝに參して古代希臘の思潮を感得し、更にまた一方に於て豊麗なる中世傳説に美の眞髓をさらへては、かの『あはれみ無きラベルタをヤメル』のごとき名篇を出し、題材をこの二方面に得たるなり。もとより深遠の學殖を欠きたれど、その稀世の天才よく幾多の名什を作りいだしぬ。後のテニスンかれが爲に動き、スピンバアンこゝに學び、ラフハエル前派の風潮その源をかれに發しぬ。げに振古その比を見ざる十九世紀後半の英國詩歌に最大の影響を及ぼしたるものは、此詩人が二十六歳の短生涯なりき。詩界刷新の大業

こゝに至りて完成を告るに至りぬ。

キイツは天才なり、必ずしも深く古代思潮を研究したるにあらざれども、こゝに深遠の學殖を以て能く古典の美をさぐり、近英の詩歌に古代藝術の趣致を移してウキクトリア朝の英詩に尙古の風を促したる天才は、タルタア、サヴエーデ、ランダア（一七七五—一八六四）に外にならず。もとより彼の名聲の由て來れるは散文の名著『想像の會談』イマジンナリ、コンヴァセイションにあれども、音調と色彩の美を兼ね備へたる叙事詩『マイバア』Guth（一七八九）をはじめとして、其他の諸篇はいかばかり後の詩人を動かしたりしぞ。ことに彼が晩期の詩集『希臘風』hellemic（一八四七）に見わたる作は、ホオマアの造語を摸し、兼ねて羅甸文學と見ゆる牧歌の微韻幽趣を傳へたる妙いふ可からず。またその無韻詩律は後のテニソンが學びたりしもの、殊にスパンバアンに至ては影響を受けること最も多く、南歐觀光の程にのぼり親しくこの老詩聖に會してより尊崇敬慕の情極めて切なりしといふ。

以上説くところの諸詩人は、前代の詩風を刷新して更に新潮を起したるもの。即ちromantic sentimentalism はバイロンに於て、沈靜の哲理派は湖畔詩人に於て、理想界の妙境にあこがると一派はシェリイ、キイツに於て、皆ともに有力なる代表者を得て、次代の詩歌に偉大の影響感化を及ぼしたるなり。

（未完）

（右に掲げたのは重要な詩人の特色と、相互の比較及び關係を極めて簡短に述べたのみである。此次に第二流の詩人を論じた一節は省略した。次號に於てはこれ等詩人の全体の傾向たる新詩風、即ちロマンタイシズムの性質を説くのである。）

VIRGIL.

The poet Virgil, in Latin Vergilius, belongs to the Augustan age of Latin literature, in the early days of the Empire. He was born B.C. 70 and died at the age of fifty. His patron was Maecenas who was also the patron of the poet Horace, in Latin Horatius.

Virgil's great works are the *Ecllogues* and the *Georgics*, which are pastoral poetry, and the *Aeneid*, which is epic poetry. He wrote in hexameters, a metre in which each line or verse contains six feet.

In the ten *Ecllogues* or *Bucolics* Virgil follows the manner of the older Greek pastoral poet, Theocritus. These pastorals are short poems, in most cases dialogues or singing contests between country people; in some mention is made of contemporary men and events.

The *Georgics* or agricultural poems, dedicated to Maecenas, are in four books of between five and six hundred lines each. In these four books he writes of the crops, of the vine, of horses, flocks and herds, and of bees. The following is a plain translation of a passage in the second *Georgic*.

“O most happy husbandmen, if only they knew their good, for whom, far from fighting and discord, the earth itself in due season scatters abundant food. If no lofty house with proud gateway pours out in all the rooms a stream of early callers, if they do not gape at door-posts variegated with beautiful tortoise-shell, robes lightly interwoven with gold, and bronze of Corinth; if white wool be

not coloured with Assyrian dye nor olive-oil scented with perfume; yet peace and safety are there, and life without disappointment, rich in various wealth; leisure with broad farm-lands, and lakes of running water; the cool valley of Tempe, the lowing of the herds, and light sleep under the trees. There are the woodlands and the haunts of wild beasts; youth accustomed to work and simple wants; the worship of deities, the reverence of ancestors. Uprightness leaving the earth left among them her last footprints."

The influence of the early Greek poet Hesiod is seen in the *Georgics* and the influence of Homer throughout the long epic of the *Aeneid*.

The *Aeneid* is in twelve books and contains nearly ten thousand lines. In the *Iliad* Homer tells of the Greeks fighting against Ilium or Troy, and in the *Odyssey* of the Greek hero Odysseus and what happened to him on his way back to Greece after the war. In the *Aeneid* Virgil tells of the Trojan hero Aeneas who with his aged father and his son escaped from burning Troy and after many hardships reached Italy and settled there, becoming the mythical ancestor of the Romans.

The goddess Juno, the consort of Jupiter, was bitterly opposed to Aeneas and the Trojans and brought him into many dangers but he passed through them all by the help of the goddess Venus who, according to the myth, was his mother. During his voyage to Italy he reached Carthage in Africa where the celebrated Dido was queen. She received Aeneas kindly and in her presence he told the story of his

escape from Troy after it had been taken by the Greeks. The following are some lines from the description of his flight when he carried his old father on his back.

"So saying, I spread a garment and a tawny lion's skin over my broad shoulders and bent neck and stooped to lift the burden. The little Iulus took my right hand and followed his father with unequal steps: my wife followed behind: we went through dark ways. And at that time every breath of wind, every sound startled me in my suspense and in my fear both for my companion and my burden, me, whom for long the hurled weapons and massed ranks of the attacking Greeks had not moved. I was already hearing the gates and seemed to have entirely escaped, when suddenly the sound of many feet seemed to come to my ears and my sire looking forward through the gloom, 'my son' he cried, 'fly, my son; they are coming: I see the gleaming shields and flashing bronze.' Then was my presence of mind taken from me by I know not what unfriendly power, for while I rushed on my pathless course and left the familiar track, alas! Creusa my wife stopped, whether snatched away by fate or through missing the way, or sinking down from weariness, I know not, and never again was she seen by our eyes."

Before his flight Aeneas had fought as long as he could and had addressed his followers with these words:

"Young men, if your minds are set on following him who braves the worst, your hearts are

valiant in vain; you see how our fortune stands; the deities, by whom this state stood, have all departed; the sanctuaries and altars are deserted; you run to help a city in flames; let us die, let us rush into the midst of the fight. The only safety for the conquered is to hope for no safety."

In the third book the volcano of Etna is described thus

"A harbour unruffled by the winds, and wide but close by, with fearful devastation, thunders Aetna, and at intervals belches forth a black cloud into the air, with piteously whirling smoke and glowing ash, and raises masses of flame and reaches the stars. At intervals it vomits forth crags and torn entrails of the mountain, and with groaning presses together the melted rocks beneath the sky, and boils up from its utmost depth."

Rumour is personified by Virgil in these words. "Immediately Rumour goes through the great cities of Italy,--Rumour, that evil thing, than which none is swifter; it flourishes by movement and gains strength by going; small in the first fear, soon it raises itself into the air, marches upon the earth, and places its head among the clouds. They say that Earth, angered by wrath of the gods, brought forth Rumour last, sister to the Titans, swift of foot, of harmful wing; a fearful monster, vast; that has, wonderful to say, as many watchful eyes, as many tongues, as many mouths, as many ears, as it has feathers on its body. By night it flies through the darkness, with shrill cries, between heaven and earth, nor does it close its eyes in sweet sleep. By day it sits and watches on the roof-top or

on high towers, and terrifies great cities, as tenacious of the false and distorted as a messenger of truth. It then filled the people with talk of many kinds and told alike things that had happened and things that had not happened."

While Aeneas was at Carthage Dido the queen felt passionately in love with him. But soon after, by divine warning, he sailed for Italy and Dido in despair took her own life. Afterwards, in the sixth book, Aeneas visited the underworld, the abode of the dead, and saw the spirit of the queen, and spoke with the spirit of his father who had died early in their voyage. In the sixth book Virgil speaks thus of the underground regions, and of the dead waiting to cross the river:

"Hence the way led to the waters of Acheron the river of the underworld; this stream rages with its vast and mazy stretch of waters, and throws up all the sand from Coeytus. The awful ferryman, Charon, with his fearful foulness, guards these waters and streams; on his chin a heavy untrimmed beard, in his eyes a flame; a sordid cloak is knotted about his shoulders. He himself poles the boat and trims the sails, and ferries the bodies across in his dark skiff. He is now old, but the deity's old age is vigorous and green. Hither in disorder to the banks were rushing the whole crowd; matrons and men, the dead bodies of those who were great-minded heroes, boys and unmarried girls, and those in youth placed on the funeral-piles before the eyes of their parents; as the falling leaves in the woods of autumn at the first cold, or as the birds which gather on the ground from the upper

air, when cold winter drives them over the sea and sends them to sunny lands. The first stood begging to be carried over and stretched out their hands in longing for the further shore. But the dismal boatman receives now these, now those, and others he keeps far off from the sand and allows not to approach."

When Aeneas saw the shade of Dido in the gloom, like a man who half sees the rising moon among the clouds, he spoke to her with tears:

"Unhappy Dido, then did a true messenger tell me of your life being ended, that you had sought death by the sword. Alas! was I the cause of your death? By the stars I swear, by those above, and if there is any faith below the lowest earth, unwillingly, O queen, I left your country." But she would not hear him:

"She kept her eyes turned away and fixed on the ground, as unmoved by his opening words as the flinty rock."

Afterwards Aeneas saw the shade of his father and talked to him but when he wished to embrace his father he could not:

"Give me your right hand, father, give it me; do not withdraw from my embrace. So he spoke, his face wet with tears. Three times he tried to throw his arms round his neck, three times the shade slipped from his grasp; one with the light winds, like a fleeting dream."

After landing with his men in Italy Aeneas was met by strong opposition, his chief opponent being the king and warrior Turnus. In the ninth book Virgil describes Turnus fighting against the Trojans and rushing alone into their midst. The following passage tells of his extricating himself and rejoining his own lines. It includes one of the similes which are often found in Homer and Virgil.

“Turnus step by step retreated from the fight and retired towards the river and the part it surrounded. Then the Trojans pressed on him more fiercely with great shouts and gathered their forces just as a band of men presses on a savage lion and attacks with weapons, but it in fear goes backwards, fierce, with glaring eyes; its anger and courage do not allow it to turn its back nor can it go forward, though this is what it seeks, through the weapons and the men. In such a way did Turnus slowly retire, in doubt, his mind boiling with rage. Twice indeed he charged into the midst of his enemies and twice he hurled them back in flight through the walls. But the whole band from the camp quickly joined together. His shield, his right hand, could not support the attack, so thickly did weapons fall on him from every side. His helmet clashed with incessant din about his hollow temples and the solid bronze was cleft by boulders; the crest of his helmet was lopped off, his shield could not support the blows; the Trojans and Mnestheus himself, in flashing armour, hurled spear after spear. Then sweat broke out over his whole body, in a grimy stream, nor was he

able to get his breath; painful gasping shook his weary limbs. Then at length he leapt from on high into the river with all his armour. The river received him as he came with its yellow stream and bore him up on its gentle waves and sent him back in joy to his companions, the stains of battle washed away."

At the close of the twelfth book Turnus is slain in single fight by Aeneas and with this the Aeneid ends.

The plain translations given can, of course, present no idea of the dignity of Virgil's hexameters and but little of the thought.

In conclusion, Lord Tennyson's poem *To Virgil* must be remembered and also the influence of Virgil on the Italian poet Dante.

E. C. H. Moule